

## 私の意見

## 改正商取法について

エース交易社長 白井 憲治



商品先物市場が産業インフラとして不可欠であると位置付けして、先物市場の世界3極の1極を担うとの意欲を示したのが今回の改正商取法の主眼でしょう。産業界からのリスクヘッジをしたいという需要は今後わき出てくるので、これに対するリスクをとつてくれる投機家がどうしても必要です。自己責任で、自主的判断で行動する投機家を我々業界がどれだけ積み上げることができます。これをやりとげないと、国、こそ野が広がらないし、国、

社会が期待する市場整備に応えられません。お客様の資金が完全保管されることは、ごく当たり前のことです。ここ5~10年でみると、

国内の取引所でリスクのヘッジ・マネージメントがでることで、アジアからの注文も増えてきます。ここで性根をそえて市場機能向上です。

監督・監視の強化も今回の改正の一つの柱ですが、信頼性を向上させるには必要なことでしょう。商品先物業界にとって厳しいことでもしませんが、これで信頼性が向上することはパラダイムが大きくなることです。

今後はリスク管理の一環として、先物市場に対する意識を高めていただきたいと思います。

監督・監視の強化も今回の改正の一つの柱ですが、信頼性を向上させるには必要なことでしょう。商品先物業界にとって厳しいことでもしませんが、これで信頼性が向上することはパラダイムが大きくなることです。

## 社会の期待に応える

## 投機家をしつかり育成

業界の変革も進み、「あるべき姿」に向かっています。我々の手で望ましい商品先物市場をつくり上げ、投機家を育てる覚悟を持たなければいけません。ハリス・ハイリターンの商品先物市場に対する世間の目は厳しいものがあります。それに十分対応できる市場に育てていきたい。

上に取り組むべきでしょう。投機というのは、日本の社会ではあまり認知されていませんが、非常に高度な経済行為ですから、広くなじんでもらえるようにしていきたい。

当業者の範囲がユーザー企業、金融機関を含めるとここまで拡大されました。が、彼らが参入してくることによって市場が成熟するし、信用が拡大します。マーケットはリスク配分の場であり、大量に売買できる環境が整うことは歓迎です。

日本では、通常の経営判断と同じレベルで先物市場でのリスクヘッジを行う意識はまだ低いようですが、リスクが多様化する中で、

産業インフラの機能を一層發揮するために――といふ今回の改正の大目標に応えるべく、着実に歩みを進めたいと考えます。

山種さんはその後、数年、理事には留まっていましたが、大蔵省（現財務省）から「商品が証券かどうかにしろ」といわれて、証券をとり、後ろ髪を引かれる思いで蛎殻町を去ったようです。

その後も仕手戦は繰り返されました。

森川 最初の頃の仕手戦

は雷給を読んで行われたものでした。だんだん、顔ぶれも場違い筋の参入が増え、金すく、力すくのものになっていました。



## 活発だった小豆仕手戦

東穀取ではよく小豆の仕手戦が行われました。昭和27年12月のことでした。買い方は谷田物産、売り方は昭栄織維という会社で、ともにいまはあります。現在、地球温暖化が大きな問題となる中で世界的に注目されている排出量取引や我々の生活に最も身近な

東穀取ではよく小豆の仕手戦が行われました。昭和27年12月のことでした。買い方は谷田物産、売り方は昭栄織維という会社で、ともにいまはあります。現在、地球温暖化が大きな問題となる中で世界的に注目されている排出量取引や我々の生活に最も身近な

東穀取ではよく小豆の仕手戦といえれば小説「赤いダイヤ」に描かれた昭和30年の仕手戦が思い出されます。当時、山種さんは理事長でありながら下端は食事をするビ

マがありました。

山種さんは理事長でありながら下端は食事をするビ

マがありました。

</